

JTBグループ労働組合連合会 第18回震災復興支援活動レポート

JTB商事労働組合

江崎 千絵

日 時：2015年5月30日（土）～5月31日（日）

場 所：福島県南相馬市

参加人数：22名

1. 活動参加にあたって

■参加のきっかけから当日まで

“まだ私は参加出来ていない”、“人として変わりたい”、この思いが今回の復興支援活動へ参加するきっかけとなりました。

今回の応募案内を初めて見た際に、改めて当時の事を思い出しました。震災が起きた2011年、当時勤務先であった関西から被災地の様子を見守りつつ、何か少しでも自分ができることをしなければと、募金をしたり自前のキャンプ用品を現地へ送ったりもしました。しかし、震災から4年経った今となつては、この震災復興支援活動も17・18回目を迎えていること自体に改めて驚くほどで、また同時に、これまで参加に踏み切つてこられなかったことに気付かされました。

“変わりたい”この思いは、組合活動において今後は自分が組織を背負って立つ人間として、考え方や視野をもっと広げ成長しなければならないということ、また一方では普段の仕事やプライベートを楽しみ、充実出来ていない自分をどうにかしたい、といった個人的な思いから成るものです。そして、支援活動に参加することで自分が何か、少しでも変われるのではないか、という取り留めもない期待を抱いていました。

今回の参加にあたっては組織内からも支部役員2名とともにグループでの応募の結果、私含め3名で参加出来ることになりました。仲間との参加が叶い、やる気もより一層増し、当日までがとても楽しみになりました。一方で、最終案内を見ながら不安に思っていたこともあります。それは、支援活動を行うにあたっての「心構え」に関することです。被害を受けた現地の方に対して、自分の言葉や態度で傷つくことのないように接することが出来るか、また、被災地の現状を初めて目の当たりにすることで想像以上のショックを受け、活動もままならなくなってしまうか。最後まで迷惑をかけずに、無事にやり遂げられか、といった自分に対しての不安を抱えていました。

こうして、意欲と期待と不安を含んだ様々な思いを胸に、当日に臨みました。

2. 活動内容

■活動目的とその背景

今回私たちに与えられた活動は、個人で所有している敷地内の竹や雑木の伐採やその裁断、枝葉の粉碎処理でした。目的としては、竹や雑木が育ち枯葉が落ちると地面の放射線量が増すため、それを防ぐことです。このような活動を行う背景として、今回の活動を主催する南相馬市ボランティアセンターでは「非難指示解除準備区域」に指定されている南相馬市南部地域の非難指示が解除される時まで、この地での暮らしを可能とするための様々な活動がなされてきました。それは、この地をかけがえのないふる里とする人たちが帰ってくるため、暮らしを再現し町を存続させるための活動です。

また、この非難指定区域へ帰りたいと願う人たちは、特にご高齢の方が多いといえます。地元の人たちによる自力の再生では限界があります。このような状況の中、今回私たちが行ったような放射線量を増やさないための取組として、自宅や周辺の荒廃した山林の整備に対するニーズが現在では高まっており、その依頼に応えるためにはボランティアによる支援活動がまだまだ必要とされています。



南相馬市ボランティアセンター。当日は他企業団体、個人参加の方も集まっていた。

■作業開始にあたって

ボランティアセンター長から現在行われている活動内容やこれまでの成果等の説明をまず受け、それから作業内容に関しては当日の朝にそれぞれのグループや各個人へと割り振られました。私たちに与えられた竹や雑木の伐採のほか、道路の掃除や草刈

りといった作業が他にもありました。センター長からの説明の中で、先に現地入りして活動を行っていた長縄副会長班の、依頼者からの言葉が紹介されました。それは「生きる勇気が湧いた。」との感謝の言葉です。これを受け、住民の人たちに勇気を与えられるほどの貢献が出来るのか、また同時に、生きる気力さえままならないほどの生活を強いられているのかと、この言葉の意味をととても重く感じ、身の締まる思いで作業場へとバスで向かいました。

作業場はバスから10分ほどの所にあり、向かう車中でも被災地の実態を垣間見ることが出来ました。廃墟のままの飲食店やスーパー、人の気配のない民家。「除染作業中」と書かれた看板のもとにある大きな土の山。白い作業着で身を包んだ人たちが乗った車が、私たちの作業場よりもさらに奥地へ進んで行く。ひとつひとつが目に焼き付きました。



南相馬市の現状や震災当時からの変遷を語るボランティアセンター長の松本さん

■作業実践と依頼者との交流

現場に着いてからの作業は1日目で約6時間、2日目で約4時間行いました。1日目は、竹や雑木の伐採、伐採したものから枝葉を刈り取り、幹や枝をさらに裁断していく作業を手分けして行いました。初日は依頼者の方とも一緒に作業をさせていただきました。この作業場の敷地内にある家には滞在時間の制限があるために、普段から住んでいるわけではなく、この日は偶然帰って来たことのことでした。

1日目は早朝より好天に恵まれ炎天下での作業となりました。作業を進めている途中、依頼者の奥様が差し入れを持参し車で駆けつけてくれました。水分補給にお茶やお水、

オロナミンCと、バナナまでいただきました。奥様からさらに、炎天下での塩分の補給にと、この地元で採れた野菜を使った手作りの浅漬けや、かき揚げまで出してください、大変美味しくご馳走になりました。

ご依頼者からの感謝の意を感じられたことはもちろんですが、私にとっては訴えにも感じる場所がありました。この野菜も美味しく食べられるでしょう、と笑顔に満ちて私たちに差し入れを進めてくれた奥様からは、まだ普段通りに住めない場所ではあるけれど、この土地の食べ物を食べても大丈夫、美味しい物が食べられる所ですよ、それを知ってもらいたい…そんな意味が込められているように、私は思えたのです。奥様はとても明るく元気な方で、震災当時の様子や状況についても難なく話してくれました。またこの地に伝わる歴史のお話なども聞かせてもらいました。

最後に「元気がもらえたよ」との言葉をいただき、初日でぐったりと疲れてしまっていたところ、ほっと暖かさをもらえ、明日へのモチベーションが湧きました。

2日目は1日目の作業に加え、刈り取った枝葉を専用機にかけて粉碎していく作業も行いました。この2日で草刈り機や裁断機を使う以外の作業は一通り挑戦しましたが、想像以上にハードな活動でした。そのような中、今回で初参加が人や経験者の人もいるメンバーで、自然と皆さんで分業して時には作業を交代しながら、また助け合いながら進められていることに大変感心しました。普段では味わえない連帯感を感じることが出来ました。私がこの2日間の活動を最後までやり遂げられたのは、依頼者からの感謝の言葉がいただけたことと、参加の皆さんで協力し合えたことによるものでした。



(左) 雑木伐採前は埋もれて見えなかった、依頼者の自宅。

(下) 枝葉を刈り取り裁断した竹や木。こんなに伐採したがまだまだ雑木林は残っていた。



3. 今回の活動を通じて

この2日間を通して実際に見て感じ取って、また現地住民の人たちの生の声が聞けたことで、この被災地の現状と変遷、震災当時の痛みを忘れてはならないことを、強く思います。震災当時に比べれば瓦礫の撤去や崩壊しかけた建物等の整備は進んでいるように見えても、そこにはまだ人々の生活が戻って来ていませんでした。荒廃した山林や廃墟のままの建物、暮らしのない民家を今改めて思い出し、今後もし復興が進まず時間が経っていくとしたら、町はどんどん風化してゆき、帰ってきたいと願う人たちもどんどん減っていく…そうして、あのふる里は消えてしまうのではないかとさえ危惧されます。人々の生活がこの地に戻り、活気を取り戻すまでにはまだまだ長い道のりがありますが、この地へ帰って来たいと願う、多くのご高齢の人たちがいつまでも帰れるその日を待つことは出来ません。この地もやがて世代が変わってゆき、帰りたと思う人たちさえ消えていくことも考えられ、そうすると環境の整備や復興のための活動さえ止まってしまうのではないかと懸念されてなりません。町の再生、復興は急務です。

この時代に生きる私たちが、当時の痛みを忘れず語り継いでいくこと、忘れないために記憶に刻み、記録に残すことが、災害が起きた時に被害を最小限に抑えることにも繋がってゆくのだと思います。自然災害は日本でも、世界を見渡しても後を絶ちません。わたしたちの今後のために、さらには後世のために、震災で被った痛みを忘れないために出来ることは、このような支援活動を続けていくこと、その状況をこれからも発信してゆくことが必要です。

さいごに、この私の発信により一人でも多くのグループで働く仲間が、被災地への意識をより持ってもらえるように“変わる”ことを願って、このレポートを締めくくりたいと思います。



左から今回共に参加した根岸社員、降幡社員と江崎。